

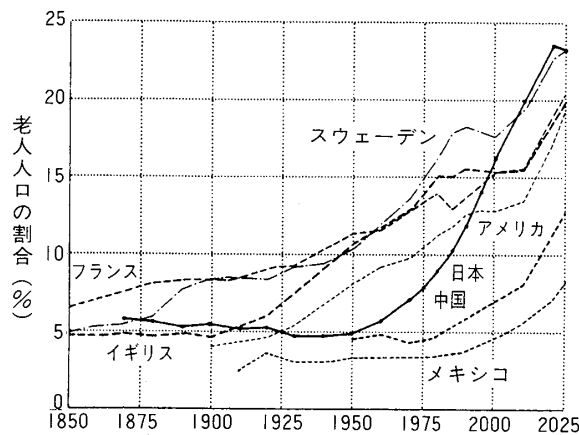
高齢女性の自立志向

—日米比較試論—

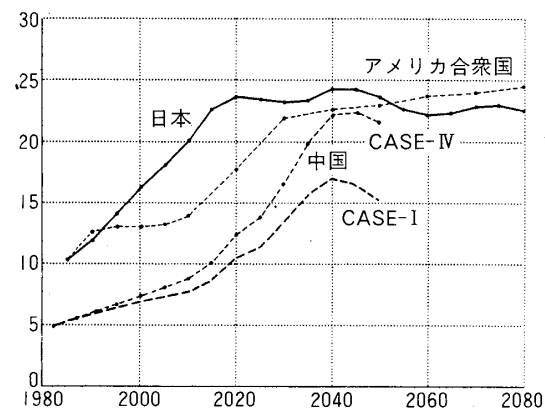
古 崎 愛 子

I 序

情報化社会、国際化社会の到来ということが様々なメディアを通して声高にいわれるのとはほぼ同じ頃から「高齢化社会」という言葉を目にし、耳にすることが多くなった。しかし情報化社会、国際化社会に関しては実体そのものは多様な側面を有し、夫々に多くの問題を内包してはいるものの、言葉から生じるイメージは発展性、利便性等、ポジティブであるのに対し、「高齢化社会」からはネガティブなイメージが湧いてくる。それは何故か。先ず指摘できるのは、人間のライフサイクルの最終段階（老年期）に属する人が国の総人口に占める割合が高くなる社会の到来を意味しているからである。日本は第二次大戦後急速な高齢化社会に向かい、すでに1970年には、65歳以上の人口が総人口の7%を占め、1985年にその割合は10%、そして戦後の第一次ベビーブーム世代（いわゆる団塊の世代）が65歳以上となる2015年には23%にまで急上昇すると推計されている（図I-1、図I-2）。人口高齢化のテンポが比較的遅いといわれているアメリカでも、2010年頃から急速に上昇し2030年以降は日本と同様に22から24%に達する見通しである。これを別の側面からみると、現在は生産年齢人口6.8人で1人の高齢者を支えているのが、25年後には高齢者の比率



出典：国際連合1956、1988。人口問題研究所1987。



出典：人口問題研究所(1987)、US.Bureau of the Census(1989)、Ogawa(1988)。

(利谷他編、老人の比較家族史 1990)

図I-1 主な国の老人人口割合の推移

図I-2 65歳以上人口割合の長期的推移

が一つのピークにくる時期で2.7人の若者で1人の高齢者を支えなければならない時代の到来を意味している。老人人口の割合が20%を越えた社会はもはや「高齢化社会」ではなく、「高齢社会」である（岡崎、1977）。

次に指摘できるのは高齢者（老年期）の諸特性が、それ以前の各時期（乳児期、児童期、青年期、成人期）に比較しネガティブな性質をもっていることである。つまり①生理的老化、②心理的老化、③社会的老化という覆うべくもない事実と、主体的にも客体的にも結びついた特性を有しているからである。この三種の老化のうち、普通、最も早くくるのは身体的生理的機能の老化、衰えであろう。次で定年退職に代表される集団からの離脱、社会的老化が訪れる。これらの延長線上に疾病、障害、経済力の低下、生活の困窮等々がある。「老人は病気と貧乏を道づれにしている」といわれる所為である。これらの問題は本人または家族の努力だけでは解決できない生活不安であるがゆえに、「高齢社会」に間もなく突入しようとしている日本（1994年9月現在、高齢者の割合は14%）及びその他の諸国の国民レベルにおける不安となりつつある。こうした現実に対するわが国の政策は誠に貧弱であり、未成熟の段階にあるといわざるをえない。近年ようやく福祉サービス、保健サービス等は高齢者の生活実体（施設生活者、施設利用通所者、在宅者）に合わせて対応できる方向でサービスが整備されつつあるときく。在宅福祉の充実の一環として「在宅福祉三本柱」といわれているショートステイサービス、デイサービス、ホームヘルプサービスの三種のサービスを、相互補完的に機能させることにより、老人の在宅生活を保障する基本的な福祉サービスとなってきている。また近年では従来の公的福祉サービスだけではなく、住民参加型の有償福祉サービスが実現されつつある。最初は武蔵野市で始められたが、現在では全国的広がりを見るに致っている。政府や自治体、地方公共団体だけに依存するのではなく、国民のパワーによる支援、働きかけがなされるのは、国民一人一人が高齢化社会に対し認識を深めるうえで重要なことであろう。

ところでどんなに高齢者社会福祉事業が充実し保健サービスが質量共に向上したとしても、「高齢化社会、高齢社会」のイメージはバラ色とはならない。それは高齢者の心理的諸問題、とりわけ後述するようなアイデンティティ再編という精神面における重大な問題に直面するからである。老年期を迎え、身体的機能は確かに低下したとしても、その年齢相応の健康を維持し、他者の助力や介護なしに生活できる高齢者は決して少なくない（図I-3参照）。図I-3は健康状態が正規分布すると考えた場合のM.M.Schrock (1980)による高齢者の健康状態のモデルである。5%の介護を必要とする障害のある高齢者と要援護の人を除いた75%の高齢者は夫々の状況の中で主体的に生きているか、主体的に生きる努力をしている人達である。副田 (1978)によると、社会学の分野で高齢者個人の主体性の問題が注目されるようになったのは、わが国では1960年代の後半あたりで、高齢者たちの

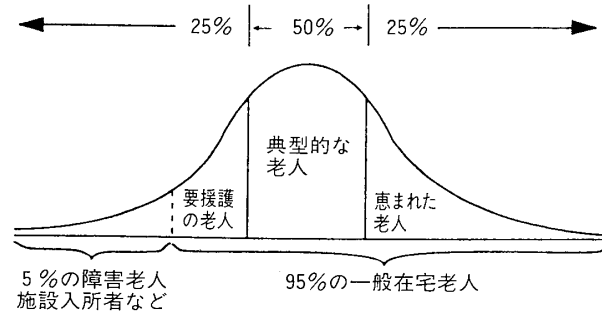


図 I - 3 老人人口への正規分布曲線のあてはめ
出典：柴田他編、老年学入門、1993

労働、学習、レクリエーション、性愛、社会参加などをめぐって、彼らの主体的な生き方に関する論議が展開されるようになったという。疾病、身体障害、老人性痴呆や低所得、生活苦など、健康、経済状況をめぐり、いわゆる「老人問題」に対し、「老年世代論」と呼び、重要な研究課題になってきた。しかし老年世代論は老人問題論ほどには体系的には整備されていないのが現状である。その主たる理由は、一つには注目されてまだ日が浅いこと。第二は老人問題論的発想が根強く定着しているため、高齢者を保護の対象として位置づけがちであり、自立して生きる主体としての視点を持ちにくくさせていることにある。しかし、より基本的要因として副田は、老年世代論の構築にふさわしい方法としての社会科学と思想的基盤としての老年観がまだ整備されていないことを指摘している。心理学の分野では、主体的に生きる青年期、あるいは成人期と同一線上に高齢者（老年期）を位置づけて、達成課題・発達課題をもつ主体という視点から高齢者の問題を考え出したのは1970年代になってからであり、組織的研究がようやく開始されたばかりである（村田、1989）。その具体例の一つに生涯発達心理学の台頭がある。人間の心の発達、成長を問題領域とする従来の発達心理学の発想を老年期にまで延長し、身心共にただ下降線をたどる老人像を捨て去って、まだ達成し解決しなければならない課題をかかえながら、積極的に、主体的に生きる時期にある人として高齢者を位置づける。人間の精神発達を人間の誕生から死に至るまで、一貫して働く過程ととらえる考え方である。

通常、発達心理学で「発達課題」という場合、それは誕生後心身の正常な発達を遂げるために、発達の各段階において各人が達成しなければならない課題である。各発達段階の課題を適切に獲得ないし達成できない場合には、適応障害を起すことになる。例えば青年期の最も重要な発達課題といえば、アイデンティティ確立課題であろう。これまではアイデンティティ・クライシスは青年期特有の問題とみなされていたが（E.M.Erikson、1969）生涯発達心理学の視点から考えるならば、第二のアイデンティティ・クライシスが老年期にやってくると考えられる。これは健康人であれ病人であれ、経済的に余裕のある人も貧

しい人も、全ての高齢者が程度の差はあれ直面し、解決しなければならない精神的危機であり、課題である。E. H. Eriksonが「アイデンティティ」の概念を提唱した当時は青年期の心理にかかわる概念として主として考えられていた。しかし今やこの概念は青年期以降の全てのステージにおいて問題となることに気づきはじめ、関心が向けられつつある (Erikson, 1982)。例えば、結婚期、親となる時期、子離れの時期、定年退職期等々、人生の節目節目にアイデンティティを再編する必要がある。とりわけ老年期のアイデンティティ再編は全ての人にとって困難な局面を有するように思われる。健康に自信があり溢れるばかりの活力や知力を支えとして仕事をこなしていた人が、様々な身体的、生理的老化、活動力の低下に直面する。そしてやがて第一線からの引退、定年という社会的経済的地位の喪失、つまり社会的老化がやってくる。この時期はまた、子どもが結婚し世帯を別にする時期でもあり、男性にとっても女性にとっても親役割の喪失を体験する。近代社会においては、向老期（老人期を己れのものとして引き受ける前の段階）をのり切るのは青年期をのり切るよりもっと難しい。その理由は、子どもから大人への移行は、一般に地位の上昇や力の拡大を伴ない、肯定的である。一方、成人期から老年期への移行は、地位の低下、自由の縮小、力の衰退を伴ない、消極的、否定的移行だからである。このような現実をいかに受けとめ、残りの人生を主体的に生きる支えとなるアイデンティティをいかに適切に再編することができるか。この課題をうまく解決しうるか否かが高齢者の幸福な生を保証する重要な鍵となると考える。上野千鶴子 (1986) は老年期に不適応を起こさずに適応していくための条件としてアメリカの文化人類学者 M. Clark と B. G. Anderson (1967) が指摘しているものを紹介している。それらは、(1)自立能力（自分の能力を自分で満たす能力）、(2)他者からの受容、(3)経済的自立と健康、(4)地位・役割の変化に対する抵抗力、(5)自分自身のイメージの変化に対する抵抗力、(6)老後の目標・生きがい、である。これらの条件に対し、(4)と(5)を除けば自立した成人であるための条件と変わるところがないと、上野は批判しているが、この批判は必ずしも当を得ているとはいえない。(4)と(5)の条件が最も必要度の高い条件であり、これを満たしたうえで、なお必要とされるのは各人が精神的にも経済的にも、行動的にも自立して生きることであろう。もちろんこの場合の自立は老年期に必要な自立であり青年期、成人期の自立とは異なる。上述した図 I - 3 に示されている75%の健康な高齢者は可能な範囲で自立を志し、主体的に生きる努力をしている、もしくは努力したいと願っている人々であろう。

「高齢化社会における女性—文化的土壌と幸福感」のタイトルによる総合プロジェクト（青木邦子、加藤春恵子、杉山明子、古崎愛子）では、上記のような認識を基礎として、高齢者が幸福な老年期を過ごすためには、「自立的に生きようとする」という個人的主体の視点からも、社会的主体の側面からも最も重要な要因の一つであろうという合意に達した。

本稿では、高齢期を目前にしている年代の人及び高齢期初頭の人々の生活の実態、老年期に関する意識、特に自立（精神的、経済的、行動的自立）に関する意識を中心に調査した日本人における結果^{註1}とアメリカ人を対象とした意識調査の結果を比較考察する。なお本プロジェクトでは予算施行上の制約等、諸般の事情によりアメリカ人を対象とした調査は試験的段階にとどまざるをえなかったことを最初にお断りしておく。

II 調査の概要

II-1 調査内容

調査内容は老後における女性の自立志向に焦点をあて、現在の生活の実態、老年期の不安、自立意識に関するものである。これまでの高齢者に関する研究では、高齢者が精神的並びに身体的機能、経済的、社会的それぞれの面でどの程度自立（あるいは依存）した状態にあるかを客観的事実として明らかにすること、またその自立状態（あるいは依存状態）を生み出している客観的要因や条件を明らかにすることに多くの関心が向けられてきた。これに対し、できるだけ他者に依存せずに自立して生きていこうとする「自立志向」という意識、態度の面に関する実証的研究は1980年頃までは国の内外を問わず殆んど手をつけられていないのが実情であったが、その後1980年代に入ってようやく関心が向けられてきている（冷水、1983、前田、1983）。しかしながら「自立」という概念、意味内容は多岐に渡っており、現段階では明確な定義はない。そこでわれわれのプロジェクトでは「高齢者の自立」の概念を明らかにする試みを先ず行ない、次いで自立尺度のステートメント項目を盛り込んだ意識調査を行なった。自立尺度作成に当ってはこれまでの自立に関する諸研究と予備調査（自由記述による）を参照して、老後の自立を測定するのに適切と思われる100項目を選択し設定した（これに関しては青木、1993を参照されたい）。そこで日本版のアンケートのうち「自立志向」の意識を調査する項目は上記の研究結果から設定された。つまり、「三鷹市の高齢女性の意識調査」（日本版）の調査内容のうち設問第6問に盛り込まれた31の項目は上記の老後の自立を測定する100項目から選定されたものである。

なおアメリカ人を調査対象とするアンケート英語版は比較の目的から、日本版を英訳したものである。いうまでもなく翻訳する際、単に日本語を英語に直訳したのでは、事柄によっては質問内容が正しく相手に理解してもらえない場合もある。この難問を解決するに当たり、現代文化学部のアメリカー教師の R.L.Spear 教授と小林祐子教授の御協力をいただいた。記して厚く御礼を申しあげる。

II-2 調査の方法

(a) 日本の場合

高齢女性の自立志向

既に杉山（1993）により報告されているが、概要を述べると、調査対象は三鷹市在住の年齢60～69歳の女性^{註2} 297名（有権者名簿からランダムサンプリングによる508名中の有効回答者数である）。有効率58.5%。調査方法は高齢者が回答しやすい方法として個人面接法によった。

(b)アメリカの場合

日本（東京都並びにその近県）に在住している60歳前後（50～69歳）の女性40名。東京ユニオン・チャーチの協力を得て教会の会員28名、その他個人的紹介によるもの12名。調査方法は郵送法（調査の主旨と依頼文を同封）によった。有効回答率は100%であった。

III 結果

III-1 家族の状況

家族の同居状況（表III-1）は夫と同居している人が両調査結果とも最も多い。日本66%、アメリカ90%である。但し、アメリカの結果が90%と高率なのは、既に述べたように調査対象の年齢が日本の場合より若く、50代が50%を占めていることによると思われる。表III-1で注目されるのは日本では0%であった「その他」がアメリカでは10%（4人）あることである。誰と同居しているかを4人についてみると、2人（65歳と67歳）は自分の母親、2人（69歳と64歳）は友人であった。

III-2 現在の生活の満足度と生きがい

現在の生活の満足度に関しては表III-2に見られるように「満足している」はアメリカの結果の方が高く、「どちらかといえば満足」を含めると日本が93%、アメリカ100%とな

表III-1 同居家族(複数回答)

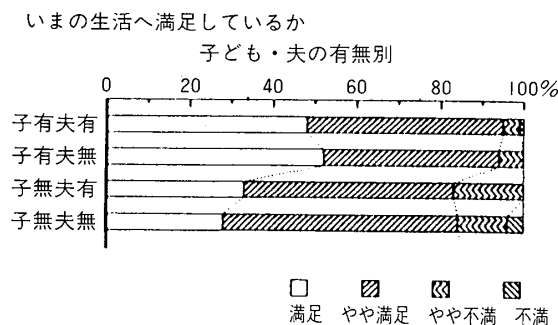
同居家族	日 本	アメリカ
一人住まい	14%	5%
夫	66	90
息子	31	15
息子の妻	14	5
息子の子	11	5
娘	15	10
娘の夫	2	0
娘の子	7	0
その他	0	10

表III-2 現在の生活の満足度

	日 本	アメリカ
満足している	46%	75%
どちらかと云えば満足している	47	25
どちらかと云えば不満だ	6	0
不満だ	1	0

り両調査結果とも殆んどの人がほぼ現在の生活に満足している。日本の結果では7%であった「不満」がアメリカでは皆無である。日本の結果で「不満」と回答した人は子どものいる人に比べて、子どものいない人の割合が多く、また子どものみならず夫のいない人の不満足度が最も高かった(図III-1)。一方、表III-3に見るように一人住いをしている人は調査対象者の中の13.8%であるが、この13.8%のうち「満足している」人は3.7%、「どちらかといえば満足」は8.1%で、合わせて11.8%であった。これを一人住いをしている人の中で占める割合でみると約84%に当る。つまり一人住いをしている人の約84%の人は現在の生活に大体満足している。これらの結果とアメリカの一人住いの人の結果とを併せて考えると、高齢者の独居が必ずしも「不満足」とは結びつかないといえよう。

次に今回の調査対象者がどのようなことに生きがいを見い出して生活しているかをみると(表III-4)、日米に異なる傾向がみられた。日本で生きがいの1位は「家族」と「趣味・



図III-1 子夫の有無別の生活満足度
—三鷹市高齢女性調査

表III-3 同居家族と現在の生活の満足度 (日本)

第1問

あなたは今の生活に、全体としてどの程度満足していますか。

次のなかからあなたのお感じに近いものをあげてください。(答えは一つ)

問13問

あなたは現在どなたと住んでいらっしゃいますか。(答えはいくつでも)

生活の満足度	人数	同居家族								
		一人	夫	息子	嫁	内孫	娘	婿	外孫	その他
満足している	137	3.7	30.6	16.5	9.1	7.1	6.7	1.0	1.0	3.0%
どちらかといえば満足している	140	8.1	32.0	12.8	4.7	4.0	7.7	1.3	2.4	2.7
どちらかといえば不満だ	17	1.7	3.0	1.0	0.0	0.0	0.7	0.0	0.0	1.3
不満だ	3	0.3	0.7	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
計	297	13.8	66.3	30.6	13.8	11.1	15.2	2.4	3.4	7.1%

表III-4 現在の生きがい

	日 本	アメリカ
家族 (夫、子ども、孫)	33%	50%
職業、仕事	12	15
趣味、余暇	33	0
社会活動	6	10
その他	5	25
特にない	10	0

*「その他」を選択した人のコメント (アメリカの場合)

- ① 家族、趣味、地域や教会での活動が一体になって生きがいとなっている。
- ② 一つを特定するのは難しい「家族」～「社会活動」全てが生きがいである。
- ③ 家族や地域の人々から必要とされること。
- ④ 「家族」～「社会活動」は勿論のこと、何事からも学ぶチャンスがあるので、全てが生きがいとなる。

余暇活動」で共に同じパーセント (33%) であるのに対し、アメリカでは1位はやはり「家族」であったが、「趣味・余暇活動」に生きがいを見い出している人は皆無であった。次で差が目につくのは「その他」と回答した割合がアメリカでは25%で第2位を占めていることである。これを選んだ人のうちコメントを書いている人が複数あったので4例を参考のため記しておいた。次で「生きがいは特にない」人が日本では10%いるのに対し、アメリカの結果は0%であることも注意をひくが、その理由については日米のサンプリングの仕方の違いによる可能性が大きいように思う。そこで総務庁長官官房老人対策室が実施した「老人の生活と意識」に関する国際比較調査 (1993) を参照したところ、高齢者の価値観にかかわる回答結果 (表III-5) に示されている国別の差が一つの示唆を与えてくれる。すなわち、全体とし「家族・子供」を大切とするのは全ての国に共通であるが、二番目に大切にすることを比較すると夫々の国の特色が鮮明に出てくる。多少乱暴な見方かもしれないが、表III-5が示しているように、宗教的価値を志向しているのは、仏教国タイとカソリックの国イタリア、そしてプロテスタント、カソリック等多くの宗派を含めてキリスト教国アメリカである。日本は僅か7.3%である。宗教や信仰が日常生活の精神的支えや人生の生きがいとして機能するものであると考えると、今回のアメリカの結果に「生活に生きがいやハリを感じるものが特に無い」とした人が0%となったのはこのような宗教に関する文化的土壌の相違が関与している可能性が大きいと考えられる。

III-3 老後の不安

これからの生活に何か不安があるかどうかの問に関する回答には日米間に殆んど差はなかった。「全く不安を感じない」人は日米とも同じ割合で35%であった。不安を感じている割合は「いろいろ不安」がアメリカが5%に対し日本は12%、「やや不安」はアメリカ60%、日本53%であった。

次いで、どのような問題に不安を感じるかを尋ねたところ割合に多少の差はあるものの、

表III-5 国別にみた「一番大切なもの」

出典：総務庁長官官房老人対策室編
老人の生活と意識（1993）

① 一番目に大切なもの

	家族子供	宗教信仰	友人仲間	近所つきあい	国家	財産
日本	88.2	1.8	1.6	2.4	1.7	3.4
アメリカ	76.8	15.7	3.0	0.3	1.3	1.3
イギリス	83.0	5.5	6.7	0.8	1.2	2.1
韓国	77.3	5.1	1.8	1.0	5.0	8.1
ドイツ	79.0	6.0	9.3	2.3	0.7	2.0
フランス	86.4	5.2	4.1	1.4	1.4	0.4
デンマーク	84.5	3.1	6.9	1.9	0.5	1.0
イタリア	89.0	7.8	1.1	0.3	0.5	0.7
タイ(2回目)	40.2	28.7	0.8	1.1	1.2	0.7

② 二番目に大切なもの

	家族子供	宗教信仰	友人仲間	近所つきあい	国家	財産
日本	6.8	5.5	19.8	22.2	4.6	37.1
アメリカ	14.7	37.3	25.4	2.3	8.6	7.2
イギリス	6.8	20.0	37.0	8.0	9.1	12.8
韓国	13.3	9.5	11.1	12.2	15.9	32.2
ドイツ	6.5	19.9	34.3	17.0	5.1	14.7
フランス	6.9	22.5	33.0	9.6	12.2	10.0
デンマーク	6.6	8.0	41.5	18.7	7.0	4.1
イタリア	6.0	47.7	17.2	4.8	7.1	10.4
タイ(2回目)	29.8	28.3	4.9	5.7	10.2	19.1

③ 一番目に大切なもの+二番目に大切なもの

	家族子供	宗教信仰	友人仲間	近所つきあい	国家	財産
日本	95.0	7.3	21.4	24.6	6.3	40.5
アメリカ	91.5	53.0	28.4	2.6	9.9	8.5
イギリス	89.8	25.5	43.7	8.8	10.3	14.9
韓国	90.6	14.6	12.9	13.2	20.9	40.3
ドイツ	85.5	25.9	43.6	19.3	5.8	16.7
フランス	93.3	27.7	37.1	11.0	13.6	10.4
デンマーク	91.1	11.1	48.4	20.6	7.5	5.1
イタリア	95.0	55.5	18.3	5.1	7.6	11.1
タイ(2回目)	70.0	57.0	5.7	6.8	11.4	19.8

表III-6 今後の生活の不安は何か(複数回答)

	日 本	アメリカ
健康問題	80%	60%
家事や身のまわりの世話	22	35
経済問題	20	20
家族問題	10	10
住宅問題	14	10

両国の順位は全く同じであった(表III-6)。「健康問題」が圧倒的に多く一位で、日本は80%、アメリカでは60%の人が選択している。次で「家事や身のまわりの世話」、「経済問題」であるが率は低くなり、健康問題の約半分から1/4の割合であった。

不安について具体的内容を自由に記述してもらったが、内容的には日米共通のものが多かった。そこで日本人の記述にはなくアメリカ人の記述にのみみられたものを幾つか取り挙げて記しておく。

<健康問題>

- ①回復の見込がないのに機械や薬で生かされること。
- ②年齢相応の心身の健康の維持
- ③家族や社会に貢献し続けうる能力の維持
- ④アルツハイマーのような障害のために心的能力が著しく低下すること

日本人が挙げている健康に関する不安の内容は主として身体的病気であったが、アメリカ人の記述は、むしろ心的能力の低下に関するものが多かった。

<家族問題>

- ①子どもや夫と良い関係を維持すること
- ②主人が退職後にも二人の関係がうまくいくこと
- ③喜びや悲しみをわかちあえる人がいないこと(63歳の未亡人、但し子どもは息子1人、娘3人いる)

日本の場合は、夫に先立たれた後の生活・孤独、夫の方が後に残った場合の生活のような漠然とした表現で終わっているのに対し、アメリカ人の記述は具体的である。また、日本の場合に上記①②のような「老年期における夫との関係」を不安材料として挙げる例はなかった。この辺りに日本とアメリカにおける家族観、夫婦間のあり方に関する考え方の差異が垣間みられる。「家事や身のまわりの世話」「経済問題」に関する内容は、両調査ともほぼ似たようなものであり、子どもや他人のお荷物になること、迷惑をかけること、経済上の準備はしているつもりだがインフレや重病になった時の経済状態の不確実さ等であっ

た。

III-4 自立志向

II-1で既に記したように、自立志向に関する意識を調べるために31項目について回答してもらった（同意する項目を選んでもらう複数回答法）。「高齢者の自立」の概念を明確にし、自立性尺度を作成するための予備的段階として準備された100項目に関し実施された調査結果は自立の次元を抽出するために因子分析により解析された(青木、1993)。日米の意識調査に盛り込まれた31項目は、この100項目から選択されたものである。本稿では因子分析で抽出された因子別に日米の結果を比較検討する。なお抽出された因子は、「親世代と子世代の生活の分離の因子」、「伝統的な同居志向の因子」、「自主的生活態度の因子」、「主体性の因子」等であった。なお今回の自立性の尺度構成の研究自体が試験的段階にあるので、抽出されたこれらの因子のうち無関係項目が少なく、含まれる項目数が多い因子についてのみ検討する。各項目を選択した人の割合を因子別にまとめたのが表III-7

表III-7 自立度の日米比較

自主的生活態度の因子	日 本	アメリカ
趣味や学習など家庭以外に活動の場をもっている	62%	95%
自分の家の収入や貯蓄について私は知っている	87	95
老後の生活の責任は基本的に自分（自分たち夫婦）にある	94	65
将来の生活について、経済的準備を私はすすめている	76	80
日常の金銭の出納は、ほぼ自分で決めている	88	90
夫に万一のことがあっても、私は切り抜けていく精神的強さを持っている	81	85
私は人生に目的を持っている	60	100
伝統的な同居志向の因子		
夫婦（または一人）だけでは寂しいから子どもの家族、子どもの誰かと同居する	38	0
子どもが年老いた親と同居するのは当然だ	28	5
身寄りの者と離れて暮らすのは寂しいので、老人ホームに入りたくない	49	25
夫婦（または一人）だけで暮らすことが不可能になった場合には子どもの世話になりたい	53	5
寝たきりになった時には、私は嫁に介護してもらう	27	0
他の誰よりも私のことを、いつも優先にしてくれる人が私は必要である	24	5
親世代と子世代の生活の分離の因子		
夫婦（または一人）だけで暮らしたいので子どもの家族や子どもとは別居する	48	60
私が老人ホームに入るのは、子どもに頼らず生活するためである	50	35
私が老人ホームに入るのは、子どもの生活を尊重するためである	51	60
お互いに独立して暮らすのがよいと思うので、子どもと別居する	62	75
私が老人ホームに入るのは、子どもに迷惑をかけたくないからである	53	55
寝たきりになった時には、ホームヘルパーや家政婦に介護してもらう	47	45
寝たきりになった時には、私は施設に入る	49	25

である。

(a)自主的生活態度

先ず「自主的生活態度」の因子であるが表Ⅲ－7から明らかなように一つの項目を除いて6項目全てにおいて選択率（肯定率）は日本人よりアメリカ人に多い。特に差が著しいのは「私は人生に目的を持っている」と「趣味や学習など家庭以外に私は活動の場をもっている」である。アメリカ人は全員が、「人生に目的を持っている」と答えたのに対し、日本の結果は60%にとどまっている。また「家庭以外に活動の場を持っている」人もアメリカの結果が95%に対し日本では62%である。この二つの項目に現われた日米の差をみただけで、子育てをほぼ終了し老年期の入口にいる今回の調査対象となった日本の女性の4割の人が、家庭以外に自分を生かす場を持たず、これという人生の目的も見い出せないで受身的、消極的な、自立とはほど遠い生き方をしていることがわかり、同性として暗澹たる気持ちにさせられる。そして同時に、彼女達が受けてきた教育の影響力を思わざるをえない。男性が明治以来、世襲的身分制から解放され、出世主義を含めて職業選択とそのための知性、技術を身につける教育を受け、個性的人間になるという自己目標を自覚的に持つたのに対し、今、老年期にある女性の大多数は良妻賢母になるのが女の天職であるという理念によった教育を受けてきた。个性的主体的に生きるよりは夫に従順であり、性別役割として家庭の枠に自己を閉じ込めることを自他ともに認めてきた世代である。女性解放運動、性別役割分業に対する疑問や批判等により女性を取りまく環境は、時代の変化に伴って飛躍的に変化している現代に生きながら、それらの変化を内実化し、本質的に女性の意識改革が達成されるには、まだまだ時間を必要とするようである。今回の調査で「男は仕事、女は家庭」という考え方について賛否を問うたが、その結果（表Ⅲ－8）からも上述の状況は裏打される。性別役割分業をはっきりと否定したのは日本では22%に過ぎず（アメリカ75%）、肯定派が1/3（33%）もいる（アメリカは1/5の20%）。

その他の項目では日米の差は2～8%の範囲と僅差であるがアメリカの方が自主的生活態度を持つ人が多かった。例外的なのが「老後の生活の責任は、基本的に自分（自分たち

表Ⅲ－8 男は仕事・女は家庭

賛否	日本	アメリカ
賛成	33%	20%
反対	22	75
どちらとも いえない	45	5

夫婦)にある」の項目でアメリカの結果が65%と著しく低くなっている(日本は94%)。後述するように、「親世代と子世代の生活の分離」「伝統的な同居志向」の両因子において自立志向は日本人よりアメリカ人に強い傾向がみられるのを考慮すると、この結果に疑問が生じる。推測の域を出ないが、問題は質問文の表現にあったのではないか。目下それ以外の理由は見い出せない。

(b)子世代との関係からみた自立志向

次に老後の自立志向を子世代との関係からみている2因子について検討する。最初に「伝統的な同居志向」の因子についてみると、6項目全てに関して肯定率は日本の方が高い。つまり子どもとの関係で自立志向が低いといえる。特に顕著なのは「夫婦(または一人)だけでは寂しいから、子どもの家族、子どもの誰かと同居する」に関し肯定する人はアメリカでは0%であるが日本では4割近くもいることである。また「子どもが年老いた親と同居するのは当然」、「寝たきりになった時には、私は嫁に介護してもらおう」これ等の項目はほぼ同じ割合で日本の方が高い。しかもアメリカ人で肯定する人は夫々5%、0%であった。この二つの項目は典型的な封建的家意識による親子観、家族観を表わしている。可能であれば子どもに頼りたいと考える人が日本人の意識の底流にあるのに対し、頼らないで済むものなら子どもとは独立した生活をしていきたいと考えているのがアメリカ人といえそうである。「夫婦(または一人)だけで暮らすことが不可能になった場合には、子どもの世話になりたい」の項目の日米の差(日本:53%、アメリカ:5%)もこの事情をよく物語っている。

「親世代と子世代の生活の分離」の因子に含まれる7項目の結果を総合的にみて指摘できるのは次の二点である。①子世代の生活と分離するのをよしとする意識を持つ人の割合はアメリカの方が多いこと。②アメリカより少ないとはいえ、子世代との生活分離志向が日本の場合にも約5割はいること、である。更に各項目間の比較から指摘できる生活分離志向の主たる理由は、④お互いにとって独立して暮らすのがよいから、⑤子どもの生活を尊重するため、③夫婦だけで暮らしたいから、である。このうち日本の同意率が一番低いのが③である。

結果を通覧して指摘しうるのは、アメリカの場合、単に子どもの生活を尊重するとか、別々に生活する方が双方にとって都合がいいといった意識より更に積極的意志的に「夫婦(または一人)だけでの暮らし」を選び取る意識があることである。その背景にあるのはアメリカ人の個人主義、自由と自立を求める価値志向であろう。日本では男女を問わず大学生になっても、否、成人し自分で稼ぐようになっても結婚する迄は親と同居している若者が大勢を占めているのに対し、アメリカでは大学生にもなれば独立し、自ら生計を営むのが当たり前になっているのは良く知られている事実である。しかもこのような自立志向は

高齢女性の自立志向

若者にのみ見られるものではなく、老後に到るまで持続するのである。若い時代から老後に到るまで一貫して個人の自由と自立を尊重する文化的土壌があるのであろう。この事実を見事に実証するアメリカ人一家の実話をここで引用しておこう。以下の話しは国務省の教育・文化交流計画によりアメリカの社会を視察した家族社会学者の増田（1969）の報告である。

地域はアメリカ五大湖の一つ、ヒューロン湖のほとりの小さな村であり、豊かな農家の一家の話である。

「クーチャックのおばあさん（未亡人）は、何不自由なく暮らしている。しかし、日本人である私の目からみると、ひとり暮らしはいかにも淋しそうである。そこで私は、奥さんのローズさんに、日本では、嫁・姑という形で、三世代が同居している家庭もあるし、新婚当時は別居しているにしても、ゆくゆくは親といっしょに住んで面倒をみるのが暗黙の前提になっている家庭もあるのだがと話をもちかけてみた。ローズさんは言下にこう答えた。「主婦が同じ屋根の下に二人住むわけにはいきません。妻には自由が必要です。姑といっしょに住んでいては、妻の自由を守ることができません」。……中略……あなたは、よいお子さんを六人も持っているが、このお子さんと老後をいっしょに暮らしたいと思わないか。彼女は、さすがに複雑な表情をしたが、すぐ気を取りもどして、はっきりとこう言った。「そりゃ私だって、いつまでもいっしょにいたいと思いますわ。しかし、それはできないことです。ひとりで淋しく暮らし、ひとりで死んでいかなくちゃならないにしても、それが自由の代償なのです」増田：アメリカの家族・日本の家族 p.124より。

老後の孤独を承知の上で、自分流の生活の仕方を自他ともに尊重する精神、自由を享受しつつ自立して生きようとする人間像が、小さな農村地帯に生活している一人の女性の言葉から鮮明に浮びあがってくる。「伝統的な同居志向」の因子に含められている「身寄りの者と離れて暮らすのは寂しいので、私は老人ホームに入りたくない」という項目が日本では約5割（49%）の人に肯定されていたのに対し、アメリカではその半分（25%）であった結果からも、両国の文化的土壌の差から生ずる老年期の自立志向の夫々の特質がうかがえる。

IV 考察

既述のようにサンプリングに問題のある調査であるので細かい統計的分析は意図的に避け、比較することに意味があると思われる結果についてのみみてきたが、概括すると日米の老年期の入口にいる女性の自立志向の度合には差があるのが示唆された。概して日本の方がアメリカより自立志向は低い。この傾向は「自主的生活態度」、「伝統的同居志向」、「親世代と子世代の生活の分離」、これら三つの因子いずれについてもみられた。自立志向が概

して日本の女性の方が弱いという傾向は一般的に予測する結果ともいえるが、他の日米比較研究（冷水、1983）の結果とも一致した。この研究はアメリカでなされた研究を基に日本の研究を行ない両国間の比較をしている。自立志向を現わすステートメント項目各々の回答スコアの平均値を日米間で比較した結果、9項目のうち7項目に関して全てアメリカの女性の方が日本の女性より自立志向が有意に強かった（危険率1%～5%レベル）。

ところで、日本における都市化、産業化、脱農業化の急激な進展は老人世帯構成を欧米的の老人独立型へ移行させる条件として作用すると思われるが、実態は1993年現在子世代との3世代同居は31.9%でありアメリカが1.3%、イギリスは0.6%、ドイツは3.3%であり（総理府調査、1993）、今回の自立志向の日米の結果でも生活分離志向はアメリカで強く、同居志向は日本で著しく強かった。これらの現象が生ずる理由はやはり親子関係のあり方、家族観の相違、ひいては人間観の違いによると思われる。どのような人間をよしとするかは教育の仕方、親と子の関わり方になんらかの違いをもたらすことが予想される。今回の日米の差異を考えていた時、念頭に浮んだのは子どもの教育・しつけの方略の日米比較研究（東、柏木、R.D.ヘス、1981）であった。先に引用した「クーチャック家のローズさん」の例に見事に描き出されていた「独立自尊の精神」は、子どもの頃からさまざまな仕方で培われてきたものであろう。自立心、独立心等と関わりのある母親の態度、しつけ方略に日米間に何か差異があるのではないか。こうした疑問に対する答えはやはり東等の研究結果に見い出すことができた。関係していると思われるものを挙げておく。

- ①自立・社会性の教育は母親の教育責任であるという認識が概して米国の母親に強い。
- ②教育観の一つとして、子どもに技術をつけるよりもまず自尊心を高めるべきとする点に、米国の母親は日本の母親とは顕著に異なる。
- ③子どもの発達への期待は全般的には日米差はないが、何をより早期に発達させたいとするかに著しい差があり、日本では情緒的成熟や大人への従順などが期待されるのに対し、米国では言語による自己主張や社会的スキルが期待されている。

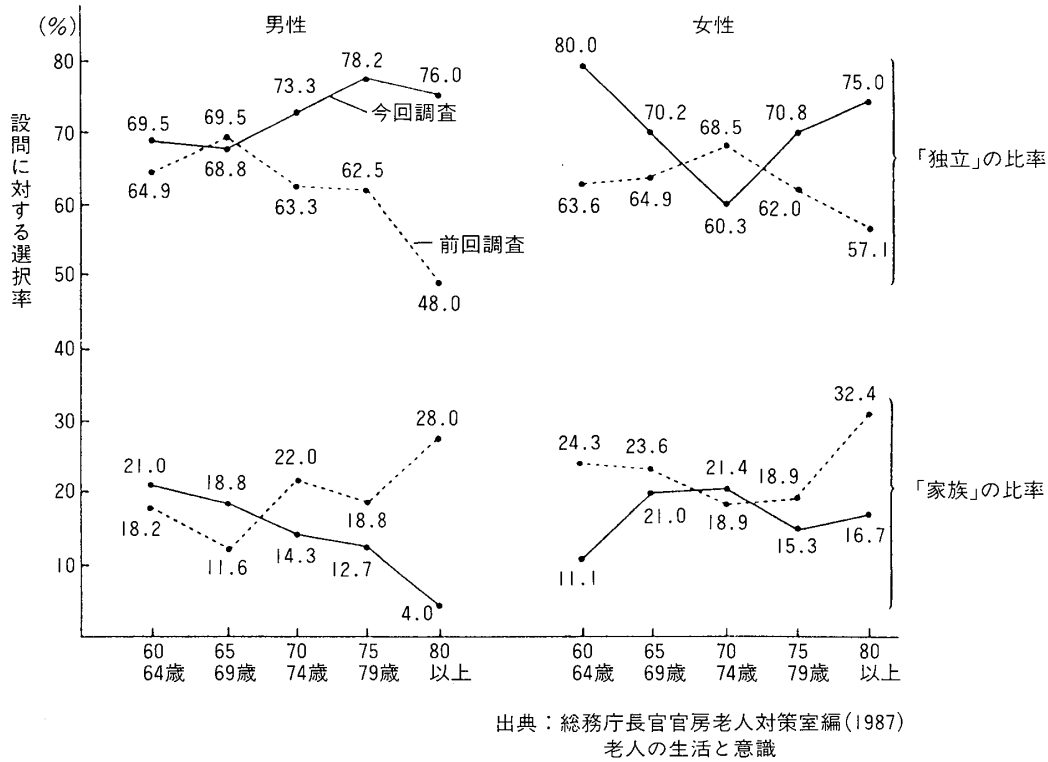
「自立」という面に焦点を当ててみると、やはり日本よりアメリカの母親が「自主独立の精神」を子どもに強く期待しているのがうかがえる。またいわゆる伝統的文化をもつ日本に比べ、アメリカでは親が子どものロール・モデルになり難い文化的土壌があるように思われる。移民してきた一世よりは二世が、二世よりは三世が新しい価値、親の世代には存在しなかった価値を発見し、自分の世界を創り上げてきたパイオニア精神である。日本では核家族化が進むにつれ、従来伝統的文化と考えられてきたものが次第に崩れはじめている現代であるが、それでも文化の原点は過去にあるといえよう。一方アメリカでは建国以来、文化の原点は未来にある。新しい世代ほど究極的な理想像としての「アメリカ人」に、より接近してゆくというのが基本的考え方であるという（加藤秀俊、1979）。このよう

高齢女性の自立志向

な考え方からすれば、子どもは青年期にもなれば親から一日も早く独立し、自立したいと願うのは自然であり、親もそれを当然のことと考えるであろう。自立心、自尊心が育ちやすい文化的土壌がアメリカにはあるのである。

このような状況に加えて、というよりは根は同じといえると思うが家族のあり方が日米では大きく異なる。アメリカの家庭の多くは夫婦が一単位をなし、夫婦を中心として子どもはその周辺に位置するという図式で家庭生活は営まれている。一例を挙げれば、観劇や音楽会、パーティーは殆んどが夜に催されるが、子ども達はベビーシッターと留守番をし、夫婦だけで出かけるのが慣習である。夫婦には夫婦の世界があり、子どもはそこに侵入することは認められないのを認識しつつ成長していく。夫々の世界、価値観を尊重しつつも子どもは前述のように親世代を乗り越えていく。このような親世代と子世代の在り方の帰結として、子どもが伴侶を得た時、もしくは自活できる年齢に達したならば親と別居するのは双方にとって至極当然のこととなる。また、たとえ親世代が老年期を迎えようと、片親が一人暮らしをしていようが基本的状況は変わらない。日本の多くの家庭では様相は著しく異なる。親一子（しかも親といっても母親である）が一単位をなし、この単位を中心に家庭は営まれている。伝統的家制度をなお温存させている日本では、家庭は夫婦単位で構成されるものであるという家族観は育ちにくく、親の世代から子の世代へ、更に孫世代へという「タテ」の結びつきが強い。夫との心の結びつきより子どもとの結びつきを優先させ、一人の女性あるいは人間としてのアイデンティティを確立することなしに「母親」であることにアイデンティティを見い出してきた人の多い現在60歳代（昭和1桁～大正生まれ）の女性の意識の底に、事情が許すなら子どもの家族、子どもの誰れかと同居したいという思いがあるのは、以上のような日本の文化的土壌に根ざしているといえよう。

ところで根強い家意識、一人の女性・人間としてのアイデンティティを確立させにくい日本の文化的土壌があるとはいえ、今回の三鷹市の60歳代の女性の自立志向、殊に子世代との関係を通してみた自立志向の程度は、決して著しく低くはない。日米を比較すれば子どもと同居している割合は多いが、その割合を上廻って子世代との分離を望む割合が多いのも事実である。東京のシルバー人材センターに働く60歳以上の男女を対象とした調査（国民生活センター、1991）も子世代との分離志向が近年強くなりつつあるのを指摘している。子どもが首都圏に住んでいても同居せず一人暮らしや夫婦だけの生活を選ぶ人、同居していても食事は別にする人が増加傾向にある。これらの傾向と関連のある興味ある資料が総務庁の1987年の「老人の生活と意識」に報告されている。老人にとって最も大切な役割についての質問で、老人の役割として「できるだけ他人に頼らず独立した生活を送るよう心掛けること」、「家族や親族の相談役やまとめ役となること」、「地域社会に貢献すること」、「仕事の面で他人の相談相手になること」のうち、どれを一番大切と思うかが尋ねら



図IV-1 最も大切な老人の役割のうち「独立」及び「家族」の比率の性別・年齢別の前回調査(1982)との比較(日本のみ)

れた(日本、タイ、アメリカ、デンマーク、イタリアの60歳以上の高齢者が調査対象)。日本、アメリカ、デンマークについては「独立」の比率が70%台と圧倒的高率で一位。日本、アメリカは「家族」が夫々17.3%、12.3%と第2位であった。そのうえ、5年前(1982年)の調査と性別、年齢の要因に関して比較した結果をみると(図IV-1)、5年ほどの間に、できる限り自立的な生活を送ることを重視したいという考え方が浸透してきているのがわかる。特に年齢要因と「独立」の比率の変動の仕方をみると、この自立志向の年齢間の差異の背景には老親扶養に関する意識が時代とともに変化してきたこと、また老後生活に関して意識の変革が起り始めていることなどがあると思われる。単純な世代効果ではなく、社会全体の多方面の変化が関与しているのであろう。今後の検討を必要とする問題である。親世代と子世代の生活は別という考え方は、時代の推移につれ日本でも確実に進行しつつあるのである。

それにつけても思い起されるのは、ある時期(10数年前頃であったか)、新聞や雑誌等に「二世帯で住める広い家」「親子二代の住宅ローン・システム」といった同居を奨励する方向の広告や記事が目を引くようになったことである。このような新同居論の根は、行政の福祉政策や住宅政策の無策にあると袖井(1982)は指摘している。わが国の行政の無策は高齢者問題に限ったことではない。筆者が指摘したいのは、上述したように時代の推移に

高齢女性の自立志向

伴ない老親扶養に関する親子両世代の意識の変化、親世代の子世代との生活分離志向が深いところで徐々に進行している事実（つまり変わりつつある国民の意識）と為政者の意識のずれである。適切な政策も見い出すことができないのを財政が不足しているからといい逃れている間に、男女を問わず高齢者の自立志向は今後一層強くなることが予想される。A.H.Maslow が提唱しているように、人間は本来的に「自己実現の欲求」を持っており、自己実現を達成することにより生の充実感を保ちうる存在である。また生命ある限り欲求を充足させる方向に行動するのが人間である。これらの心理的特性からすれば、寿命の延長によりますます老年期が長くなった現在、一般的にみて高齢者が自立することの重要さに確実に目覚め始めたのは自然なことであり至極人間的なことであるといえよう。かかる論点から考えるならば、21世紀は質量ともに「高齢者パワー」の時代になるのは必至である。

高齢者の自立の問題を高齢者の社会的主体化と関連づけ、高齢者の自立解放運動の視点から論じている加藤春恵子（1994）によると、アメリカでは既に「高齢者パワー」は差別問題を基盤として（反年齢差別）、かなりラディカルな社会運動を産み出している。例えばグレイ・パンサー、アウル（両者ともリーダーは高齢女性）等の自立解放運動や、全米退職者連盟、全米高齢市民協議会（リーダーは男性）などである。「グレイ・パンサーはコンシャスネス・レイジングの機会を老人たちに提供し、自らの老いを直視し、自らの皺の一つ一つに誇りをもちながら、社会的主体として活動するための道筋を提起している」（加藤、1994、23～24頁）。周知のようにアメリカでは1979年に「年齢による雇用差別禁止法」が既に制定されている。こうした社会運動に関しても多少の遅れはあるものの、日本においても全国的広がりのある草の根運動や1983年にスタートした「高齢化社会をよくする女性の会」はグローバルな視野から多様な問題を取り上げ、毎年シンポジウムを開催し、その記録を出版するという地道な活動を行なっている。こうした日米の社会活動の一端からも「高齢者パワー」は既に確実に深く浸透し、動きは始めているのがわかる。

V おわりに

歳をとることは、ただ生物としての生命曲線が下降するとみなし、生命の花がしぼんでいく事実だけを強調し、その実がみのるのを見ようとしないならば、高齢者の問題、とりわけ「幸福な老年期の過ごし方」を適切に捉え理解することはできないであろう。本稿では他者の援助や介護なしに生活できる人を中心に論じてきたが、「老年期の幸福感」を問うとき、援助や介護を受けなければならない人が不幸で、健康な人が幸福であるといった単純な二分法が通用しないのはいうまでもない。また自立志向を主として子世代との係わりに関して論考したが、同居、別居の問題も三世同居老人が他者依存的な老人、別居して

いる人が自立した老人とする二分法にも問題があろう。経済的事情、住宅事情などから別居したいと願いながらも同居を余儀なくされている場合もあろうし、またその逆もあろう。老後を誰れと何処に住み、何を生きがいとして生きていくかなどの側面は、どのような文化的土壌の中で生きているかにもよるところ大であろう。

何処に誰れと住もうとも老年期を幸福に過ごせるか否かは、老年期のアイデンティティの再編、それもポジティブなアイデンティティの再確立であり、自立的に生きる精神力の涵養であると考えられる。そのためには、現在のあるがままの自分（心身の老化現象）を受容し、過去（若さ）を回顧したり回帰願望にいたずらに振り廻されるのではなく、むしろ精神的に一層成熟し発展することを願い、そのための努力をすることであろう。青年期、壮年期の価値体系を老年期にそのまま維持しようとするならば、老年人類学者の片多(1979)も指摘しているように、老後に不適応を起すことになるだろう。どのような老年期の過ごし方が幸福であるとするかは、きわめて文化的プロセスであると同時に、個人的プロセスである。人間が成熟してゆく過程の最終段階の老年期が人生の黄昏であるのは確かである。しかし日の出の美しさとは全く異質の静かな美しさが日没の黄昏どきにあるのを想起する時、幸福な老人像は、あるいは文化を越えた人類共通の原理によって捉えうるのかもしれない。

註

1. 日本人（三鷹市在住の60歳代の女性）を対象とした調査の一部は杉山明子（1993）により既に報告されている。
2. 今回の調査対象を女性に限定したのは、老後の問題は女性の問題であるとしばしばいわれる通り、高齡者の介護は殆んどの場合、女性に期待されている。介護の問題については対応策に男女差がはっきりとある。一方、近年仕事を持つ女性が増え介護を期待される女性にとって仕事を取るか親の介護を取るか深刻な悩みになってきている。このような時代にあって女性達が高齡化社会の諸問題をどのように考えているかを探ることを目的としたからである。
3. 「高齡者の自立」の概念を明らかにするのを目的に行なった研究では、対象者を社会学、心理学、女性学の各研究者とし、夫々のグループ別の因子分析と三グループの結果を合わせた「全体群」の因子分析がなされたが、本稿では「全体群」の因子分析から抽出された因子を用いた。

引用文献

- 青木邦子（1993） 高齡化社会における女性（文化的土壌と幸福感）——自立概念と自立性尺度の作成——東京女子大学比較文化研究所紀要 54、79-122
- 東洋、柏木恵子、R.D.ヘス（1981） 母親の態度・行動と子どもの知的発達——日米比較研究——東京大学出版会
- Clark, M. & Anderson, B.G. (1967) *Culture and Aging: An Anthoropological Study of Older Americans*. Charles C. Tomas.
- Erikson, E.H. (1969, 邦訳 1973) アイデンティティ——青年と危機 金沢文庫
- Erikson, E.H. (1982, 邦訳 1987) ライフサイクル、その完結 みすず書房

高齢女性の自立志向

- 樋口恵子 監修 (1993) 女・老いをしあわせに ミネルヴァ書房
- 加藤春恵子 (1994) 高齢化社会の主体的創造——脱家父長性社会への道程 そのⅠ 客体から主体へ 東京女子大学比較文化研究所紀要 55、13-31
- 片多 順 (1979) 「中年と老年」 綾部恒雄編「人間の一生——文化人類学的探究 第ⅩⅠ章
- 加藤秀俊 (1979) アメリカ人——その文化と人間形成——講談社
- 国民生活センター編 (1991) 高齢者の自立をめぐる生活問題 中央法規出版
- 前田大作 (1983) 三世代の女性における老化・老人に対する態度 社会老年学 18、11-19
- Maslow, A. H. (1962、邦訳 1964) 完全なる人間 誠信書房
- 増田光吉 (1978) アメリカの家族・日本の家族 日本放送出版協会
- 村田孝次 (1989) 生涯発達心理学の課題 培風館
- 那須宗一・増田光吉編 (1985) 講座 日本の老人 3 老人と家族の社会学 垣内出版
- 岡崎陽一 (1977) 高齢化社会への転換——日本の人口・経済・社会——広文堂
- Schrock, M. M. (1980) *Holistic Assessment of the Healthy Aged*. John Wiley & Sons
- 柴田・芳賀・長田・古屋野 編著 (1993) 老年学入門——学際的アプローチ——川島書店
- 冷水 豊 (1983) 三世代の女性における自立志向の態度 社会老年学 18、20-28
- 袖井孝子 (1982) 定年からの人生——日本とアメリカ——朝日新聞社
- 副田義也 (1978) 「概説・主体的な老年像を求めて」 現代のエスプリ 126 「老年」
- 総務庁長官官房老人対策室編 (1987) 老人の生活と意識 比較調査結果報告書
- 総務庁長官官房老人対策室編 (1993) 老人の生活と意識 第3回比較調査結果報告書
- 杉山明子 (1993) 三鷹市における高齢女性の意識 東京女子大学比較文化研究所紀要 54、123-135
- 利谷・大藤・清水編 (1990) 老いの比較家族史 5 比較家族史学会監修 三省堂
- 上野千鶴子 (1986) 「老人問題と老後問題の落差」 伊藤光晴・河合隼雄他編 老いの発見 2 老いのパラダイム

〔現代文化学部教授 (心理学) 1989~91年度総合研究9 (高齢化社会における女性—文化的土壌と幸福感) 研究員〕

**A QUESTIONNAIRE ON ATTITUDES
TOWARD OLD AGE**

- Q 1. Are you generally satisfied with your present life? Check the one answer that comes closest to the way you feel.
1. quite satisfied
 2. rather satisfied
 3. rather dissatisfied
 4. quite dissatisfied
- Q 2. What in your everyday life makes you feel life is worth living? Select one answer.
1. family ties
 2. work
 3. hobbies
 4. community activities
 5. other:
 6. nothing in particular
- Q 3. Do you believe in the idea that a woman's place is in the home?
1. yes
 2. no
 3. no strong opinion on this
- Q 4. What comes to your mind when you hear the expression "a home for the aged"? Check all the answers that come close.
- a) a place where you can live a comfortable life with people your age
 - b) a lonely(or gloomy)place
 - c) a place where you don't have to worry about getting sick
 - d) a place where you feel the irksome pressure of group living
 - e) a place where you can act your age
 - f) a place where old people are unnaturally isolated
 - g) a place where you can live free of your children's concerns
 - h) other:
- Q 5. Would you tell us about your family?
- Are you presently married 1.yes
2.no
- Do you have any children? 1.yes (male………)
(female………)
2.no
- Q 6. Would you tell us your thoughts about the following statements? Check all the statements that you agree with.
- 01()I have a place outside the family where I can pursue my own interests.
 - 02()I am not easily influenced by circumstances and opinions.
 - 03()I am well-informed of the income and savings of the household.
 - 04()Other people do things for me only when they feel like it.

高齢女性の自立志向

- 05() I do not want to go to a home for the aged because I would be lonely living apart from the family.
- 06() I believe that it is basically the responsibility of an individual to look after himself in his old age.
- 07() I have begun to make financial preparations for my future life.
- 08() I will go to a home for the aged only as a last resort when I become bedridden.
- 09() I usually make my own decisions about day-to-day financial transactions.
- 10() I am constantly worried about losing the support and affection of those who are indispensable to me.
- 11() I will arrange to have a visiting nurse or someone look in on me when I become bedridden.
- 12() I have a purpose in life.
- 13() I need a person who always thinks of me ahead of all others.
- 14() I want to be taken care of in an institution when I become bedridden.
- 15() I believe it is basically the responsibility of the government (or society as a whole) to care for the aged.

(Questions addressed to women with husbands) Check all the statements that you agree with.

- 16() I consult with my husband about almost everything and usually take his advice.
- 17() If my husband were to die, I would be strong enough to get over it.
- 18() If marriage became unbearable, I would be able to get a divorce.

(Questions addressed to women with children) Check all the statements you agree with.

- 19() I want to live with the children because it is sad to live alone (or just with my husband).
- 20() I live apart from the children because I want a serene life for myself (and my husband).
- 21() I go to a home for the aged because I want a life independent of the children.
- 22() I live with the children because I want to be looked after by them.
- 23() I live in a home for the aged because I respect the rights of the children to lead their own lives.
- 24() Because of my financial situation, I want to live with the children.
- 25() I live apart from the children because I believe it is best for all concerned to live independently.
- 26() The reason I go to a home for the aged is that I can live there free of the children's concerns.
- 27() The reason I go to a home for the aged is that I do not want to be a burden to the children.
- 28() It is only natural for children to live together with their aging parent (s), so I live with mine.
- 29() I believe it is basically the responsibility of children to look after their aging parent (s).
- 30() When it becomes impossible for me (or for my husband and me) to live alone, I want to be taken care of by the children.
- 31() When I become bedridden, I expect my daughter-in-law to look after me.

Q 7. Do you have any worries about your future life?

1. no worries
2. some worries
3. lots of worries

Q 8. If your answer to Question 7 is either 2 or 3, what are you worried about?

- a) not having financial security
- b) being in poor health
- c) being unable to take care of yourself
- d) not having a happy family life
- e) not having a comfortable house to live in
- f) other:

If you did not mind, would you tell us what worries you most and why?

Q 9. Have you ever looked after older people?

1. yes
2. no

Q10. If your answer to the above Question is yes, who is it?

- a) your own parent
- b) your spouse's parent
- c) your spouse
- d) other:

Q11. Have you ever had either full-time or part-time job?

1. yes
2. no

Q12. If you answer to Question 11 is 1, when and how long?

- | | how long (year) | total |
|--------------------|-----------------|-------|
| a) before marriage | _____ | _____ |
| b) after marriage | _____ | _____ |

Q13. Whom are you living with?

- a) alone
- b) your husband
- c) your son
- d) your son's wife
- e) your grand children
- f) your daughter
- g) other:

高齢女性の自立志向

Q14. How old are you?

Q15. Would you tell us your school career?

- a) high school
- b) junior college, university
- c) other: